



子育て伴走「だいじょうぶ！」通信 No. 16

～みんな大切 笑顔あふれる家庭とこども園に～



R 6. 7. 27 やすぎこども園 園長 福島朗博

◆園風景から 0歳から5歳までリズムタイム♪～新たな魅力ある保育づくり～

小学校に上がって長時間の学習姿勢を保てるためには、幼児期からの体幹と集中力・持続力・粘りなどが欠かせないと考えます（園長だより12号「非認知能力」参照）。そこで、今年度より次のようなねらいをもって、園あげてリズム運動に取り組むことにしました。

- 体幹を鍛え、転ばない体づくりをする
- 柔軟性を身につける
- リズム感を身につけ、豊かな運動力につなげていく
- 聞く力、見る力、集中力を育てる



保育者で曲や内容（意識する動きなど）を話し合って練習し、まず金魚やワニのハイハイ、うさぎのピョンピョン、かめの反り返り、とんぼの飛行と片足バランス運動から始めました。各クラスで時間を見つけて「リズムタイムはじめよう♪」と曲を流して子どもたちを誘いながら楽しく取り組んでいます。これから、少しずつ軌道にのせ、しなやかな体を目指してクラス同士で交流して見せ合ったり一緒に体を動かしたりして、運動会や保育参観等で披露できるようになればいいねと話しています。年中通して曲のリズムに合わせて楽しく体を動かしているうちに、表現力や集中力、体幹などがついていくといいなと思っています。子どもたちのそんな様子がごらんになれることを、どうぞ楽しみにしててください♪



【にじ組さんのとんぼ】



【つき組さんのかめ】



【そら組さんのわに】



◆言葉を育てるかわり ～コミュニケーションを楽しむ 心のキャッチボール～

9か月をすぎると赤ちゃんは指さしが出てくるようになります。手ざしや指さしが出てくると、私は「お～！この子もついに出来たぞ。」と大げさでなくゾクゾクと大きな感動を覚えます。それぐらい指さしは大きな意味もっています。言葉といってもいいかもしれません。まだその



子はしゃべれてなくても、言いたい気持ちがその人差し指に宿っているからです。右表のように、要求や共感などを表したりします。上写真はほし組の子どもたちの一コマです。右側の男の子が友だちの方を指さして、何やら楽しそうな気持ちがいっぱいに伝わってきますね。

指さしだってりっぱな「ことば」

- ・「あっ！」・驚き(10ヶ月～)
- ・「これも〇〇あれも〇〇」・比較(11ヶ月～)
- ・「見たことあるよ」・なじみのもの(11ヶ月～)
- ・「あれ」「これ」「それ」・目に映る物なんでも！(11ヶ月～)
- ・「これちょうだい」「あっちいきたい」・要求(11ヶ月～)
- ・「なんだ、あれ？」・新奇物発見(1歳～)
- ・「なんていうの？」・名前の質問(1歳～)
- ・「ね、見てよ！」・語りかけ(1歳～)
- ・「これはあっちにほすのよね」・場所を示す(1歳～)
- ・「この人してる！」・あいさつ(1歳半～)
- ・「わかってるんだけど、もう一回おしえてよ」・質問(1歳半～)
- ・「パパあっちだよ」・情報伝達、不在対象(1歳半～)
- ・「〇〇ではなくて△△がほしい！」・要求(1歳半～)
- ・「(〇〇ちゃんのお鼻どこ？)にここだよ」・説明の代わり(1歳半～)
- ・「これおなじ、あれもおなじ！」・マッチング(1歳半～)
- ・「パパ行っちゃった～」



指さしを身振りやことばに換えていく

原要求の指さし

原叙述の指さし(共感して)

心のキャッチボール♡

言葉を育てるには、子どもだけでは難しく、子どもが大好きで伝えたいと思える大人がいて、その両者のコミュニケーションのやりとり、キャッチボールが大切です。子どもに伝えたいことの内容があり、それをわかろうとする大人の気持ちがあることで、キャッチボールはうまくいきます。でも、「うけとったよ！」

というボールを、子どもの顔を見ずに中身もずれて一方的に投げれば、子どもはキャッチできないですね。相手をよく見て（観察）、行動や気持ち、場面に見合ったボールを受け止めやすいように適切なタイミングで投げることで、思いが伝わり、気持ちを共有することができます。（思春期の子どもとのキャッチボールは難しいですね。私は息子たちにど直球を投げれば、パーンとはね返される失敗をよくしてました…。相手の出方に合わせて変化球を投げたりかわしたりしながらの忖度で、キャッチボールになっていくのですね。）

ということで、まず、わが子がどんなことに興味を示しているのか、様子をじっと観察してみてください。何かに注意を向けて興味を示しているとき、それをとらえて言葉をかけて気持ちに共感してあげましょう。ボク・ワタシの興味に関心よせてくれていると感じて、こちらにまなざしをおくってきたときには特に、言葉をかける大チャンスです！

さて問題です。ダンゴムシ大好きなあっくん（やすぎこども園の子も大好きです！）がダンゴムシを見てたら丸くなったので「あれ～?!」と横にいたお父さんを見上げましたよ。「はて？」、お父さん、あっくんのまなざしにどう応えてあげますか？



なんでもいいですよ。大事なのは、子どもの気持ちになって（行動や表情から、それまでの経験などの背景を思い出しながら）感じたことを身振りや言葉で返してあげることです。子どもと一緒にコミュニケーションを楽しむことは、**子の「今ここ」で体験したことに、大人のかけた言葉が重なり合う**ので、子どもの記憶や印象に残って**言葉が身について**いきます。

このように、大人と子どもが同じものに注目することを「共同注意」とよびます。子どもは自分の発した声、指さしやまなざしを受け止めてくれる大人がいることで、自己肯定感をもつと同時に、「わかる」ことの意味が入り、「もっとわかりたい」と思って大人を見たり、大好きな大人にかけられた言葉を真似たりするようになります。そうして、「話したい」「伝えたい」意欲につながっていきます。言葉をただ教えるのではなく、共感して一緒にコミュニケーションを楽しむこと、心のキャッチボールをすることが言葉の発達につながります。

子どものことばの育ちによって **言葉かけの内容を考えるといいですよ！**

①**ことばを促す段階**（子どもの行動や気持ちを言葉にして表す）「あれ～、むしむし、だんごむしだ！」「むしむし、ころころ♪おもしろいね。」「だんごむしだ。かわいいね。」

②**ことばを拡げる段階**（子どものもつ言葉を意味的、文法的に拡げて2、3語文へ発展させる）「あら、だんごむし、ころころ丸くなっちゃったね～。」「ころころ、おだんごみたいね～。」「あらふしぎ。さわってみる？ころころ転がるね～。」「だんごむし見てるのね。あっくん、だんごむしだいすきだもんね～。どうして丸くなるのかな？」

コミュニケーションが成立するために

・伝えようとする側

- 伝えたいこと、つまり内容があること
- 伝えたいという思いがあること
- 伝えたいと思う相手がいること

・受け手となる側

- わかろうとする気持ちがあること
- 相手の気持ちや心の動き、興味や関心の有り様、発達の様子といった相手の世界を知っていること
- 相手が伝えようとしている内容を理解する力